様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 23 年 12 月 27 日現在

機関番号：14202
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2009～2011
課題番号：21792304
研究課題名（和文）　ニューカマーのセルフヘルプグループ支援の有効性の検討
－異文化看護の視点から－
研究課題名（英文）　Examination of the effectiveness of supporting self-help groups for expectant Brazilian females residing in Japan - From a cross-cultural nursing perspective.

研究代表者
植村　直子（UEMURA NAOKO）
滋賀医科大学・医学部・客員助教
研究者番号：90510347

研究成果の概要（和文）：在日ブラジル人女性を対象に、継続的に妊産婦交流会を実施し、参加者同士の交流を促し、その有効性を分析した結果、参加前は、【夫・子どもと一緒に健診・交流会に来る】【交流会のイメージがなく気が進まない】【なんとかなるさと思っている】、参加時は【子どもが生まれる前に勉強するのは良いと思う】【妊娠中のことや、赤ちゃんの世話、制度について知りたい】、参加後は、【妊婦健診後は家族で出かけるので早く帰りたい】【産後困った時に相談したいと思う】とカテゴリー化された。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to implement and analyze the effectiveness of ongoing maternal networking events prompting interaction between participants. Prior to participation, comments included they “would attend physical examinations and events with their spouse/children,” “could not envisage a networking event so were unenthusiastic” and “would manage somehow.” During participation, they “thought it good to learn something prior to childbirth” and “wanted to know about pregnancy, childcare and the system.” After participation, they “wanted to hurry home after the physical examination due to family plans,”and “might ask for advice postpartum.”

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	400,000	120,000	520,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学
キーワード：ニューカマー、セルフヘルプグループ、異文化看護

１．研究開始当初の背景

研究代表者はＡ県内において、ニューカマー（日系ブラジル人）である住民への家庭訪問によるインタビューおよびフィールドワーク（妊婦健診、新生児訪問、乳幼児健診、予防接種などの場面への同行）を通して、ニューカマー女性の妊娠・出産・子育ての実態について研究してきた（萌芽研究「ニューカマーに対する異文化看護の提供指針の確立に関する研究」代表　滋賀医科大学　畑下博世）。その結果、ニューカマー女性は日本での妊娠・出産・子育てに必要な情報的サポートが十分に得られておらず、子どもの世話において互いにサポートせずに孤立した状況で過ごしていることが明らかとなった。

２．研究の目的

Ａ県在住のブラジル人妊産婦を対象に、継続的に妊産婦交流会を実施することにより、参加者同士の交流を促し、その有効性を分析することを目的とした。

３．研究の方法

Ａ県在住のブラジル人妊産婦を対象に、2010.4 月～8 月の期間に交流会を 13 回実施した。交流会企画の準備として、ブラジルサンパウロ市にあるサンパウロ大学看護学部、および育児中の日系ブラジル人家庭を訪問し、ブラジルの医療・保健システム、日常生活の様子を視察した。

交流会では、参加者の希望に沿って、ポルトガル語版テキストを用いて説明を行うなどした。分析は質的帰納的法を用いた。倫理的配慮として、滋賀医科大学倫理委員会の承認を得た。

４．研究成果

妊婦の実参加人数は８名（初産婦３名・経産婦５名）、産婦１名（初産１名）、夫８名、子ども８名であった。述べ参加者数は妊産婦 14 名、夫 13 名、子ども 11 名であった。フィールドノートから、対象者の交流会での様子や発言について分析した結果、参加前は、【夫・子どもと一緒に健診・交流会に来る】【交流会のイメージがなく気が進まない】【なんとかなるさと思っている】、参加時は【子どもが生まれる前に勉強するのは良いと思う】【妊娠中のことや、赤ちゃんの世話、制度について知りたい】、参加後は、【妊婦健診後は家族で出かけるので早く帰りたい】【産後困った時に相談したいと思う】とカテゴリー化された。参加者は、交流会参加前は気が進まない様子であったが、参加時は必要な情報を得て、出産に備えることは役立つと認識していた。また、参加後は産後困った時にも相談したいという希望が見られ、日本での出産への準備性は高まった。しかし、交流会へ再来した参加者は２組のみであり、ブラジル人妊婦同士の交流を促し、セルフヘルプグループとして機能するには至らなかった。この理由では、外国人労働者として多忙な日常を過ごしているという境遇や、休日は家族で過ごすことを重視する価値観などがあることが考えられた。これらの結果を踏まえて、欧米で取り組まれているような、グループ型妊婦健診などを参考にし、妊婦健診の待ち時間を有効活用した交流会のあり方など、検討していく必要がある。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

植村直子，畑下博世，金城八津子，上野善子：ブラジルの医療保健システムと母子保健事情－サンパウロ視察報告―
保健師ジャーナル（査読なし），65 (12)：1032-1035, 2009.

〔学会発表〕（計１件）

①Uemura, N., Hatashita, H., Kinjyo, Y. & Arnault, S. D. (2011). An examination of the effectiveness of supporting self-help groups for expectant Brazilian females residing in Japan.-from a cross-cultural nursing perspective. The41st Biennial Convention. Texas, USA.

６．研究組織

(1)研究代表者

植村　直子（UEMURA NAOKO）

滋賀医科大学・医学部・客員助教

研究者番号：90510347